

植物短歌辞典

〈続 篇〉

東京 加島書店 発行

編者紹介

明治三十九年東京に生まれた。
東京帝国大学農学部林学科卒業。
東京農業大学造園科講師を経て、
早稲田大学理工学部建築科講師、
現在専ら著述に従事。

著書に、庭園襍記（昭和十三年西ヶ原刊行会）と西洋造園史（昭和三十一年彰国社）がある。

植物短歌辞典 続篇 © 定価 一二〇〇円

昭和四十二年十一月十一日 初版発行
昭和五十年十月二十日 発行



編者 針ヶ谷 鐘吉
発行者 加島 喜代志
印刷者 新興印刷製本株式会社

発行所 加島書店

東京都練馬区高野台四丁目八番六号

電話 九九六局 二七五九番
振替口座東京九五七八〇番

続篇の序

本書の正篇を世に送ったのは昭和三十五年のことであった。かような辞典の出版を企画した主旨については、既に正篇の序にくわしく述べたので、ここに再び繰返す必要もないと思う。本書出版の直後、故谷鼎氏は主宰誌「近代詩歌」に逸速く読後の感想を混えながら本書を懇切に紹介して下さった。私は故人のこの御厚意に対し感謝の念を深くするものであるが、左にその文章の一節を抄録して本書の性格を知っていただくよすがとしたと思う。

「(前略) 作歌をしていると、植物の名称ばかりでなく、あらゆるものの名を知りたくなるのが一般だ。物の名称を知らなくては表現も不十分になるし、鑑賞も行き届いたものにはなりにくいからである。何も植物に限るものではなく、簡明に言えば、知ることは愛情のもとである。一般の言葉にしても、多くかつ深く知る必要のあるのはいうまでもないし、その一つとしての物の名称を、さらに植物のそれを多く知る必要は、当然すぎる位当然なことだ。(中略)

続篇の序
われわれの身近い周囲にあって、多種多様性を求め得るものが植物だということは、第一にいえるのではあるまいか。こういう意味でも、この『植物短歌辞典』は読んでおもしろい。一つの植物に対

する、心の鏡への映し方が、それぞれの作家によって異なる点もその引用歌によって手早く知られることも興味である。(中略)

だいたい八千首前後の作品が引用されているのではないかと思われるので、読了するための時間は相当要するわけだが、ページを追うて順次に読む必要はもろもないもので、引くと読むとを兼ねつつ、随時随処に目の通せるものである。そして、各作品の心の鏡への映し方、つまりその捉え方をゆっくり味おうだけでも、写真と抒情との関係を考えたり、実行したりするための参考と十分なるものである。つまり、植物に対する知識を直接に得る便があるばかりでなく、作歌の参考手引きともなる所以である。(後略)「

幸いにも正篇は頗る好評裡に程なく品切れとなり、再版の必要にせまられた。私はこれを機会として、その続篇の編集を企画した。まず蒐集範囲について、正篇では万葉古今から江戸時代にかけての所謂古歌をも含めたが、続篇では主として現代活躍中の歌人のいわば現代短歌をその対象とした。そして正篇に収載した現代歌は歌壇に地位の定まった専門歌人の作品がその中心であったが、ここでは歌を余技とする人達の作品を出来る限り広範囲に亘って採択することに努力した。そのためにはその人達の属する結社や流派などに全くこだわることなく、目に触れ次第到る所から、前書と同じ要領で植物歌を拾い蒐めて出来上がったのが本書である。

編者はもとより専門の歌人ではないから、歌の巧拙はよくわからないが、無名歌人の植物歌にも専門歌人に劣らず、情感を込めて詠んだ歌が多いことは本書を編集してゆくうちによくわかった。しかもその詠歌植物の種類も、正篇には全然詠まれていないものが大分多く見受けられ、新しく四百種以上の植物が取りあげられている。例えば高山植物や熱帯植物や今流行の観葉植物までが詠まれているのがその特徴と言える。

編集の要領は大体正篇にならって行なった。従って正篇の凡例に殆んど付け加える必要はないと思うが、一言お断りせねばならないのは、植物の解説は既出のものは一切省き、新しく出て来た種類についてのみ行なったことである。そのために前に用いたもののほかに左の諸書を参考にした。

『樹木大図説』（全四巻）

上原敬二著

昭和四十年刊

『観賞植物図説』

宮沢文吾著

昭和三十八年刊

『原色日本高山植物図鑑』

武田久吉著

昭和三十八年刊

『統原色日本高山植物図鑑』

武田久吉著

昭和四十年刊

『観葉植物』

瀬川弥太郎著

昭和四十年刊

又挿絵には正篇で用いた文献のほかに次の二冊を追加使用した。

『絵本野山草』（全五巻）

法橋保国画

宝曆五年刊

序の篇続

『増補地錦抄』（全八巻）

伊藤伊兵衛著 宝永七年刊

なお選んだ植物歌の中には参考書にも出ておらず解説出来ない植物が相当にあった。学名も勿論不明なので、これらを巻末に「学名不詳の植物歌」として一括掲載した。そして詠者の方々に一々書面を以ておききした。その結果かなり懇切な御回答を得たので、これを該当歌のあとに「詠者回答」として付記したのである。

最後に本書に採集した短歌資料は早稲田大学図書館の蔵本をはじめとして、松村英一氏と故谷鼎氏の御蔵書、それに前篇と同様、中島彦治郎、山本喜策両氏の所蔵本に依るところ多かった。ここに深くその御厚意を謝するものである。

昭和四十二年 秋

編 者 識

あ

アイアンウッド Iron Wood

アイアンウッドの名で呼ばれる樹木は非常に多く、上原敬二著『樹木大図説』によれば十七種にも及んでいる。そのうち主なものを挙げれば、カロライナしじみ(*Carpinus caroliniana Walt.*) 鉄木 (*Lyonothamnus floribundus A. Gray var. asplenifolius Br.*) タガヤサン (*Cassia siamea Lam.*) テンボク (*Erythroxylum areolatum L.*) などである。ここではタガヤサンについて解説する。

まめ科の喬木。マレー・東インドなどに自生。葉は互生。数羽状複葉、長さ約三〇センチ。小葉は十二乃至二十八で長楕円形、帯白色、やや革質。花は鮮黄色の蝶形花冠。心材は黒と赭の紋様があり、堅牢美麗で建築器具の材料に賞用。

なげなく立てる如くに茂りたるアイアンウッド松の木に似る(冬薔薇) 小林 慶子

アイスランドポッピー *Papaver nudicaule L.*

けし科の多年草。シベリア原産、観賞用。高さ三〇センチ内外。葉はすべて長柄ある根出葉。花茎は長く高さ五〇センチ位、花は径四〜六センチ。一般に淡黄色の四弁花であるが、濃朱紅色まで変化がある。花期は七〜八月。多くの園芸品種あり。

アイスランドポッピーが扁平に開ききる危ふさのあり冬乾く室(青螺) 遠山 光栄

アイリス Iris

アヤメ属の植物。イチハツ・アヤメ・ハナショウブなど。

アイリスの花はかげなくにはへれば幸はちかく在る思ひすも(雪の音譜) 生方たつゑ

刃のごとくアイリスの葉がひかる窓妥協なさざりし夜をひとり待つ(青粧) 生方たつゑ

アイリスの花ある茶房早春のひかりを銀の匙にてすくふ(白日) 宮原 茂一

アイリスの肉しなふ花の摘み咲く宵のかげ吾の水がめ満てよ(銀と葡萄) 杉本 清子

アイリスがうす紫に咲ける花舗みづみづとして車道に向けり(あげばり) 清水ちとせ

あねい

花

運命にひれふすなかれ一茎の淡紅あふひ咲き出でむ
とす（大和） 前川佐美雄

はるはると来着きし家の裏口に葵の花の赤く咲けり
し（白木権） 原 阿佐緒

朝よりの暑き庭なり今年また葵の花ののぼりつめて
咲く（松嶺） 谷 鼎

少女趣味の我かも知れず朝庭に葵の花のピンク愛で
ゐる（黒耀） 宮原あつ子

芯ながく咲きし葵の花閉ぢて芝生の上の黄なる夕照
り（さるびあ街） 松田さえこ

実 葵の実こぼれて庭に萌えしもの青々として冬となり
たり（地表） 佐藤佐太郎

あおき

葉 日が差せば誘はれ落つる林雪あり青木はあをき葉を
ひるがへす（雪の音譜） 生方たつゑ

わが家の這入の青木夕雨の暗きに濡れてその葉光ら
す（年輪） 谷 馨

吾庭の籬の青木葉を広み雪降り積めば頂垂れにけり
（清和） 松村 満雄

花 四弁花のこまかく暗き紫と見極めて去る隈のあを木
を（松嶺） 谷 鼎

実

落葉せし楓の下びは青木の実青くみのりてそれさへ
親し（東京） 堀内 通孝

朝まだき冷たき空気の中にみる青木の実はも色の清
しき（母子草） 栗原 秀子

雪かづく葉がくり見えてつぶらなる青木の朱実色あ
ざやけし（謎の微笑） 堀江 堅

青木の実稚きがやや形づく黒みて旧き実の落つる頃
（枯山水） 植松 寿樹

あおぎり



（花臺所載）

芽 遅き春忙しく過ぎて青桐の芽ふくらむ午後燕飛び来
る（番外地） 福田 清

若

梧桐は葉をひろげたりくれなるの若葉の伸びの速かにして（藤浪）

杉浦 翠子

青

蒸し蒸しと梧桐の葉のうごかざる朝ことしの虫なきいでつ（蒼きふるさと）

小川 博三

土用すぎて梧桐の葉のやはらかき梢を見つつ暑き日暮れん（地表）

佐藤佐太郎

梧桐のか広青葉のこもごもに揺らぐと見れば風さやぎ出でぬ（対岳集）

本居 亮一

梧桐の葉茎も幹も陽光のなか耳たれてゐる緑のかたま（暗い川）

君島 夜詩

梧桐の広葉おもげに打揺らぎ大きしら雲南にかがやく（茜雲）

窪田 空穂

梧桐はいまだ散らねば西寄りの日ざしの中にその葉を振ふ（春天の樹）

小暮 政次

実

梧桐の実夾ちらせる道の上に涼しき風が今朝流れた（泥火山）

田中長三郎

病

梧桐に葉を巻く虫のつきそめて二百十日の厄日近く（藤浪）

杉浦 翠子

落

梧桐の茂みより黄に萎えし葉が落ちしは見たるのみならず音も（雪眼）

和田 周三

さ庭への一本梧桐我が部屋の小窓が下に葉を落し初

む（入日）

都筑 省吾

梧桐の一葉一葉が枯れ落ちて裸木となりぬ目の前にして（閑雲）

桐田 落村

幹

散り果てて梧桐庭にたつ見ればこの木にめづる幹の素直さ（鉄刀木）

林 菊之輔

梧桐は幹を見る樹か窓外に雨に濡れるぬれいろのよさ（水門）

等々力亜紀子

寒の空鋭く冴えて裸木の梧桐の幹太くたくまし（丘の家）

遠藤 節代

あおや（あを）

石蓴 *Uva pertusa Kjellman*

緑藻類の海藻。干潮線の岩石に着生、葉状体は鮮緑色で扁平。二層の細胞から成る。アオノリの代用として食用とするが不味。

潮したたり吊す石蓴の風に匂いくる朝見ゆる水色の空（干潟と森）

山田はま子

あおじそ（あを）

青紫蘇

シソの一種。茎・葉ともに緑色。葉・果実は食用。こぼれ種いつか芽生えて青紫蘇の緑の下より葉をのばしたる（聖丘）

御木 道正

鮮やかなる緑そよがする青紫蘇の一群に思ひを鎮めむとせり（黎明）

渡辺 元子

花 蒔きし覚えなき青紫蘇も育ちつつ白くかすかなる花

つけはじむ(この梅生ずべし) 安立スハル

青紫蘇のいつとしもなく咲き散らひ細かにしろし朝

しめる土(冷気湖)

千代 国一

実 かぐはしき青紫蘇の実を夕食に食へば清くて今宵眠

らむ(北国砂浜集)

間島 定義

あおな

朝空は片明りして背戸畑の青菜の畝に雨さむくふる

(まほら)

結城哀草果

畝正しく庭の青菜の生ひ立つに日ざし透きたりその

一葉毎(北西風)

扇畑 忠雄

楊柳の汚れし色に立てるかな河原涸れて青菜をまけ

り(淳彦歌集)

金石 淳彦

あおのつがさくら(あおのつがさくら)Phyllocladus alectica A.Hell

高山性の常緑小灌木。高さ凡七〜一五センチ。茎の基

部は横臥し枝は皆上向き叢を成す。葉は線形又は披針

形、枝上に密に互生す。七、八月の間、下向せる緑白色

の壺状花を着く。

雷鳥の脚もとにして咲きつつくあをのつがさくら風

韻を生む(百鶴原)

森 勇

あおのり

水際にゐざりて人のなほ居れば鑑にとほし川の青海
苔(相沢正歌集) 相沢 正

あおみどろ

青みどろの固体と化して見ゆる海すでにブルネイの

国境を越ゆ(ララン草房)

橋本 徳寿

村裏の日向に並ぶ苗代の畔際に寄りて浮く水綿

(まほら)

結城哀草果

青水泥岩間にわきて湛へあつき湯に浸りゐる女をみ

たり(虹)

前田 夕暮

百段の石はしりくたり青水泥古池のなかの亀に見ら

れき(未刊歌集II)

前川佐美雄

青みどろ浮く水の辺にひとりごつつひの言葉も浄く

しあらず(万春)

山本 友一

護岸に着く青みどろ濃くなりてゆく潮に乗り来る風

寒からず(冬季)

阿部 静枝

池亭より落ちゆく水の養へる水綿らのしづけきも見

む(求青)

鹿兒島寿蔵

竜の口より水ほとばしる石の池は変ることなし浮く

水綿も(麦を吹く風)

同

青みどろ泡立つ田など思ひ臥す昼の臥床に目はあけ

て臥す(松籟)

谷 鼎

青みどろ生ひし樹下の冬の池あまたの色の鯉を生かしむ（明園） 鈴木 金二

小松生ふ端山の下の水溜青みどろ湧き井守住みたり

（泥火山） 田中長三郎

岩を走り一つにたまる熱き湯に揺れて漂ふ青みどろ

はも（雲の座） 松村 英一

汀べに青みどろ寄る池の面春近くして水量を増す

（あかつき） 広野 三郎

あをみどろの色やや顕てる壕の面に芽吹かぬ老樹の

影落ちて昼（十字路のない街） 馬場 園枝

あおもりとどまつ

おうしらびそに同じ

青森とど松の秀つ枝浮きつつさだまらず音して霧の

吹きくだるなか（青螺） 遠山 光栄

あかざ

地境のきまらぬままに秋となりそこのみ繁るあかざ

の類が（暗い川） 君島 夜詩

狭まりて残る空地に枯るるもの食ひし黎のうつくし

き茎（陰のある道） 千代 国一

ゆであげし青き黎の舌ざわり雑草ながらいみじかり

しよ（秋風嶺） 青柳 競

あかざなど枯れたつ見れば各々が実をもちゐるなり

まこと哀れに（閑雲） 桐田 露村

畑のなかに生ひたるあかざ思ひつつ摘まざりしかば

硬くなりしかな（淳彦歌集） 金石 淳彦

アカシヤ

花 一人来て朝の光に息つけばたまゆら匂ふあかしやの

花（雲逝きぬ） 富田 充

生きらるるいのちなりしを死なせしぞ針槐の白き花

もぎて嗅ぐ（山脈遠し） 吉野 鉦二

甘き香はいまだ通わず山径の緑の中に顕ちくるアカ

シヤ（番外地） 福田 清

朝しづく散るとし見れば庭土におちてまろべりアカ

シヤの花（玉樟） 神原 克重

アカシヤの低木の花は盛りすぎ砂丘の果ての砂に垂

れかかる（生滅） 山下 陸奥

真白花こぼれやまぬに見上げたり浅黄の空にゆるる

アカシヤ（砂庭） 吉田 雄司

丸の内道にこぼれてアカシヤの花の白きに夕にはか

雨（夜明け空） 岡野直七郎

夕立の風になやめるあかしやの花散りやまず踏みつ

つあゆむ（珊瑚） 北見志保子

散りがたの花うとましきアカシヤの並木の涯に畑輝

ふ(麦の花)

板宮 清治

芽

柳のわた豊かに飛びてアカシヤの新芽の光る古里に
居り(職場) 斎藤 喜博アカシヤのみどりの萌えのまだのびて浅間の裾野ゆ
ける寂しさ(秋山) 小野 昌繁

青

アカシヤの若き幾もと夕日差す緑やはらかに風にそ
よぎて(東京) 堀内 通孝空青しアカシヤの葉は更に青し百舌鳥は来りて長く
止まらず(樹形) 猪川 耐静かなる決意のさまにアカシアが葉を振るひをり冷
え来る砂に(凍虹) 田中大治郎

実

アカシヤの老木一もと葉の稀に照れる野空に莢実を
鳴らす(水ゑくぼ) 山下 清

黄

一本のアケシアのむら黄くまどりて日の出の空に流
れたる朱(旅人) 泊 良彦

幹

アカシヤの黄ばみし木肌裂かれゆく時に土叩くおと
もまじりて(青粧) 生方たつる

並

こぶだらけに切りつめられしあかしやの老いたる並
木路吹かれつつ往く(冬季) 阿部 静枝アカシヤの路樹おしなべて咲くべしと脈絡もなく少
女言ひ出づ(北西風) 扇畑 忠雄

あかそ

アカシヤのしろがね色の光遠くすがすがとして雨の
あくる日(埃吹く街) 近藤 芳美
アカシヤの並木に電車ひびきつつ鉾山街に灯の入り
たり(まほら) 結城哀草果くれなるの赤麻はぬれて雫せり粒くだかれし軽石み
ちに(春尽きす) 生方たつる和合してやさしき道祖神まつる道赤麻のくきのくれ
なる冽し(北を指す) 同たたかひの日を語りつけふあゆむ奥峽の村に赤麻
がさけり(晩紅花) 松本 滋代

あかだも

あかだもは(一)「はるにれ」(二)「あきにれ」(三)「おひよ
う」(四)「しろだも」(五)「やちだも」の別名である。この
うち(一)(四)については正篇に解説したゆえ、(二)(三)につい
て述べよう。しろだも (*Litsea glauca Sieb.*)くすのき科の常緑喬木。葉は楕円形で裏面が白く、車
輪状につく。晩秋に黄褐色の小花を多数つけ、翌年の秋
冬に赤色の球果が熟す。種子から油を採り、蠟燭の材料
とする。別名、たまがや、しろたぶ。

おひつち (Ulmus lacinata, Mayr.)

これ科の落葉喬木。高さ約三〇メートル。樹皮は淡褐色で裂目があり、剝脱する。葉は長さ二〇センチ、鋸歯が多く、先は大きく三つに分かれ、中央のは細長く尾状に尖る。裏面には毛がある。初夏淡黄緑色の小花をつけ花後翹ある果実を結ぶ。材は器具用・炭用。樹皮の纖維を用いてアツシを製する別名、あつしのき、アツシ。

あかだもの林の中をくだりつつ石狩川の白き源流
(多く夜の歌) 宮 終二

あかのまんま

わが刈りし朝の秣に露ながら一鎌^{ひととぎ}ほどのあかまんまの花(まほら) 結城哀草果

かくばかり哀れと思ふものなけむあかのまんまの白けたる花(秋山) 小野 昌繁

あかのまま花をつづりし穂のさきに露ののぼりて時ゆきにけり(雨の洗へる) 遠山 繁夫

赤まんま咲きうづめたる野のおもて不意に揺ぎてしづまる空気(多く夜の歌) 宮 終二

浅き水流るる石のかたへにはわづかに揺るる赤まんまの花(弧をぬぐ橋) 内山 泰一

赤蜻蛉飛び交ひしげき日のつづきあかまの花藪に

溢れぬ(砂庭)

吉田 雄司

いちちやく野わきのあとをたちなほる泥をかむりて咲くあかまんま(車) 長沢 美津

あかまつ

夕なぎし湖^{うづうみ}の岸に二本^{ふたもと}の赤松の幹うつくしきかも(まほら) 結城哀草果

赤松のあさき林に入にけり夏鶯の山ごもり鳴く(藤浪) 杉浦 翠子

青山の傾斜^{ひだり}にならぶ赤松の木肌秋待つ色とぞにほふ(松嶺) 谷 鼎

母性鎮めて生きつつぞぎし赤松の幹疎らなり秋の陽に錆び(白炎) 西沢みち子

曇ぞらしづまる下^{した}に赤松の秀でて幹のたかき裏山(冬薔薇) 小林 慶子

歩み来てここもむなしも一本の赤松立ちて日あたれる原(さびさび唄) 柴谷武之祐

春の山に赤松の幹のやはらかさ雑木をぬきてすくくと立つ(銀砂子) 平野 梶子

赤松の林の中をゆくときに明るき幹の膚類に照る(冬花) 小野 昌繁

赤松は貴人^{きじん}のごとし列^{はら}なりて浅みどり葉を空にそよ

がす(夜鹿集)

服部 嘉香

赤松の幹のみ目立つ繁り山重き緑の幾重かさなる

(ひとつの火)

尾上 柴舟

あかめがしわ

いぶかりてつくづく見れば花に非ず赤目柏の芽生な

りけり(硯池花片)

中島彦治郎

窓の前の赤芽柏を渡る風雨の如しと思ふをりふし

(淳彦歌集)

金石 淳彦

黒き種子ひねもす散らす赤芽がしは雨ながかりし夏

も終りぬ(石に咲く花)

松村 英一

あかも Gautheria adenanthrix Maxim.

いわはぜの別名。つつじ科に属する常緑小灌木。高さ

二〇センチ。葉は互生し卵形鋭頭、辺縁に鋸齒あり。夏

梗頂に鐘状の白花を聞く。果実は赤熟し食すべし。美味

なり。

雨すぎて冷やき峠の道隈に赤ももといふ高山植物

(山木魂)

片岡 恒信

アカンサス

アカンサスの広葉ちちまり残りゐる芝に大寒の夕日

澄みさす(麦を吹く嵐)

鹿兒島壽藏

アカンサス花序たくましく吹きつげり梅雨晴れて庭

の気温蒸し来つ(蒼き年輪)

福田 文枝

光さす芝生の緑アカンサスの黒き緑をわれはたのし

む(麦の庭)

柴生田 稔

濃緑のひろ葉を抽きてアカンサス古代ギリシヤの花

園と咲く(槌)

内田さち子

あきからまつ

秋唐松 Thalictrum Thunbergii DC.

うまのあしがた科の多年生草本。高さ約一メートル。

葉は細かい羽状複葉。裏面は白色を帯びる。八月頃黄白

色の小花を多数つける。茎・葉を乾して胃腸薬とする。



あきからまつ

(草木図説所載)

こまかなる秋唐松の花に降る雨は玉なす薄黄に透き
て(水ゆく岸にて)

水町 京子

あきたぶき

秋田より酒井がもて来し蔦の根の大き葉ささげよ彼
が為にも（老楓の下） 窪田 空穂

あきのきりんそう（あきのき
りんさう） 秋の麒麟草

Solidago Virga-aurea L.



あきのきりんそう

（草木図説所載）

きく料の多年生草本。山野に普通。通常三〇〜六〇センチ。茎は細くて強く、下半は紫黒色を帯びる。葉はやや厚く、無毛で暗緑色、秋、多数の小さな黄色の頭状花の密生した穂をつける。別称、あわだちそう。金花（きんか）一枝黄花。

見栄えなきものと盗らぬが頼みにて秋のきりん草咲く時待たむ（山の井） 松村 英一
伐り跡の明るき野辺に咲き群れて黄に照り透る秋の麒麟草（水ゑくぼ） 山下 清

霧つたふ斜面の草にたまゆらを鮮明なりしあきのきりん草（雪鳥） 立川 敏子

あけび

花

いくたびかあふぎ過ぎつつ頼みちの通草が未だ稚きものを（彩羽） 遠山 光栄

孤りなるさびしき心幽かなる通草の花によせてさびしむ（白木権） 原 阿佐緒

君が家のテラスのあけび蔓のばし天に向ひて花つけにけり（雲表） 武富 秀文

山陰の崖のべにしてむらさきのあけびの花のしじに咲きたり（風雪） 黒沢 良男

雨けふる晨しつけき片谷にあけびの花の黒くつらなる（北国砂浜集） 間島 定義

ゆく春の峽のひかりに紫の通草の花のさくを惜しみつ（地表） 佐藤佐太郎

山径に通草の花の散るにさへいまは寂しきわれならなくに（琥珀集） 細田 直俊

芝庭の隅の小棚のあけびづる花さく季を羨しみて佇つ（練馬南町） 藤川 忠治

実 蔓科に野分立ちそめ木通の実葉がぐりにいくつ色づきにけり（深巷） 橘 馨

まどかなるあけびの垂れし一隅を夜の園に見れば心
はあつし（動物聚落） 服部 直人

人の眼を憚りやぶ木にからみたる紫紺の通草実を割
りにける（田螺） 伊藤 豊

通草の実を陰囊なす思へど大人が傍に大人の愛し妻
はべれば言はず（遠街） 山田 弘通

あいつ（あか） 赤秀 *Ficus wightiana Wall.*

くわ科の喬木。高さ約二〇メートル。幹の周囲から氣
根を出す。葉は楕円形で長柄、洋紙質で平滑。春、枝ま
たは幹に極めて短い柄のある淡紅色の果実を生ずる。我
国西南方暖地の海辺に自生する。愛媛県三崎村と佐賀県
入野村のアコウ樹林は北限分布地として天然記念物に指
定。用材、薪材。別名あこぎ。あこのき。雀榕。

荒海のあら潮風のなかに生ふる室戸榕樹はいとほし
きかも（風雪） 吉井 勇

枝垂るる榕樹林の逆光を潜りつつゆく磯ひより日は
（雪鳥） 立川 敏子

あさ

刈らるべき麦を隔てて盛りあがるごとくに青し麻の
畑は（遠小波） 横尾登米雄

盆すぎて涼しき蔭の花目立たぬほどにこぼれつ

つあり（銀砂子）

平野 梶子

あさがお

芽生まれくるものも祈りのかたちして朝顔の芽土つけ
てをり（波） 萩原 アツ

朝顔の二葉の形をなつかしむいとけなかりし頃の記
憶に（松籟） 谷 鼎

葉

あら草の秀にもからみて青々と朝顔の葉は垣をおほ
ひぬ（低い窓） 長谷川銀作

蕾

朝顔が蔓のぼしつと苦まだ待たずさかんにのびを急
げる（木の根） 岡山たづ子

あさがほの葉あひに眼立つその蕾いたくふくれて明
日待たしむ（藤浪） 杉浦 翠子

花

あさがほのその瑠璃色のふかぶかしはな時刻ながく
保つ頃かも（同） 同

一つ鉢に培へば咲く朝顔のはっきり白しわが座右の
夏（この梅生ずべし） 安立スハル

腐たげに薄紅ばかり大輪のあさがほの花あやしなま
めく（山さんご） 川浪 磐根

朝顔がつぎつぎに花をひらく故あかつき早し露光る
庭（竹むしろ） 横幕 統平

繁葉蔭日に背きたる朝顔一輪牡丹しぼりは午もしば